不屈の精神と直向きなココロ

専攻科一年　岸上　沙布

この夏、私はレモニー・スニケットの「世にも不幸なできごと」シリーズを手にした。人間は悲しい事に、他人の不幸に敏感である――良い意味ではなく、悪い意味で。自分より不幸な人間を知る事で安心したり、優越感を得たり、自分はあの人よりは恵まれていると思い込んだりするのだ。

レモニー・スニケットの書く三姉弟妹はことある毎に、行く先々で不幸なできごとに見舞われる。けれど、この本は三姉弟妹を応援したくなる。けっして優越を覚えることはない。三姉弟妹にハードルを乗り越えて欲しい、そう心から望んでしまうのだ。そして読み終えた後、それはけして幸せな終わり方ではないけれど、不思議な事に応援していた読者がいつの間にか応援されているのだ。自分も頑張らなくては、弱気になっていてはいけない、そう前向きになれる本である。

人間、生きていると幸せなことばかりではない。時には壁にぶつかり、時には挫折し、時には一人で闘わなければならない。幸せなことより不幸なできごとの方が強く印象に残るのはその時その時を必死で乗り越えようと頑張ってきたからだろう。幸せはただ感受すれば良い。しかし、不幸は自分自身で乗り越えなければならない。

レモニー・スニケットは文中で何度もこう述べている――もしもこの本を手にとったばかりなら、下におろすのはいまからでも遅くはない、ハッピーエンドの話を好むなら別の本を探しなさい――と。その言葉通りに読むことを放棄しても構わない。読む読まないは読者が決めることだから。しかし、思いきって――たとえハッピーエンドが好きであっても――読んでみると、何かしら得られるものがあるだろう。

もし自分の身に不幸が舞い降りたなら、きっと嘆くだろう。どうして自分が？そう思うかもしれない。けれど不幸は避けることのできない現実である。この本を読んで私は、ボードレール家の三姉弟妹のようにありたいと思った。不幸を悲しむ前に自分の力で打開しよう、いつでも前向きに、決して諦めずに…。そういう直向きな姿勢でいたいと思う。人生不幸ばかりではない。幸せなことは忘れてしまいがちになっているだけなのだ。不幸を嘆くのではなく、不幸を乗り越えようとする姿勢が大切なのだ。一つ不幸を乗り越えたなら、それは自分の力となる、自信となる。このシリーズを読み、私は不屈の精神、直向きな心の素晴らしさを学んだ。決して諦めなければ何らかの解決策が生まれるだろう、つまずいたり落ち込んでも、それに立ち向かう気持ちを忘れなければ、いつかきっと重厚な壁

であれ高いハードルであれ乗り越えることができるだろう。

　これから先、悩んだり迷ったりすることがあるだろう。そういう時こそ直向(ひたむ)きに、そして諦めずに立ち向かっていきたい、私はそう思う。不幸なできごとは過ぎ去ればいつかいい思い出に、自分の力となるだろう。挫折して不幸がトラウマになってしまう前にもう一度だけ試してみる…その一途な心こそが前へと進む一歩なのだ。

　Never　give　up！

世にも不幸なできごとシリーズ

　最悪のはじまり

　爬虫類の部屋にきた

　大きな窓に気をつけろ

　残酷な材木工場

　おしおきの寄宿学校

レモニー・スニケット作　草思社